

第3巻

ハン トン
韓 東
Han Dong

シヤオタオ

小陶一家の
農村生活

「家族」と「時代」を見つめる自伝的長篇

一九六九年、南京から蘇北（江蘇省北部）の農村に移住した作家・老陶とその家族の物語。老陶はこの村に「根を下ろす」べく、農民たちと同じように家建て、樹木や作物を植え、家畜を飼う。妻の蘇群は簡単な医師を学び、村人たちの病気の治療に当たる。大人たちの苦勞を知らなかった息子の小陶も見聞を広げ、しだいに成長していく。



【著者紹介】一九六一年、南京生まれ。父は小説家の方之。文革中は批判を受けた両親とともに下放。文革後、山東大学哲学科に入学し、在学中から詩作を始める。八〇年代は新世代の詩人として活躍した。九〇年代に入ってから小説を発表。個人的な体験を大切にする姿勢、家族の歴史にこだわった作品に特徴がある。

【収録作品】

シヤオタオ

「小陶一家の農村生活」

【訳者】

飯塚容（中央大学教授）

Take Free !

勉誠出版

Tel03-5215-9021

Fax03-5215-9025

WEBSITE. <http://bensei.jp>

「コレクション中国同時代小説」第一期（第1巻～第5巻）

2012年4月下旬刊行！

※第二期（第6巻～第10巻）は6月刊行予定

第一章 下放

1

一九六九年十一月、老陶は家族全員を率いて三余に下放（都市部の幹部職員が思想改造のために農村や工場へ行くこと）した。それに先立って、老陶は赤鉛筆で地図の上に丸い円を描いた。老陶が丸で囲んだところはボロきれのような形をした湖だった。老陶は言った。「これが洪沢湖、全国で三番目に大きい淡水湖で、我々が行くところだ」

洪沢湖は半分が洪沢県に属している。洪沢県は水上公社と陸上公社に分かれていた（公社は人民公社のこと、一九五八年の大躍進政策以降、農村に組織された農業および政治の共同体）。老陶一家の行き先は、もちろん陸上公社だった。陸上公社と言っても、やはり運河が縦横に走り、豊富な洪沢湖の水を灌漑していた。水のあるところには魚がいる。老陶は家族全員に呼びかけた。「洪沢湖に魚を食べに行くぞ！」魚だけでなく充分な穀物があつて、食べ物に困らないのは陸上公社のよいところである。老陶の想像の中で、洪沢県は豊饒の地であり、少なくとも豊饒の地に発展する潜在能力と将来性があつた。

下放に志願すれば、解放のチャンスを得ることができる。この二つは最初から関連があつた。窓ぎわの幹部は多く、下放に応募した人たちはとても張りきっていた。老陶はこのチャンスを逃すことを恐れていたから、細かく考える暇がなかったのも致し方ない。しかも、選べる場所に限られていて、蘇北の二つの地区——徐州と淮陰という江蘇省で最も貧しい場所しかなかった。老陶は当然、この点をよく理解していた。

下放に志願した幹部の一部は蘇北出身なので、里帰りするようなものだった。ある者は親戚に身を寄せようとしていた。またある者は蘇北で仕事をしたことがあり、現地に知り合いや友人がいた。これらの要素が、彼らの選択の根拠だった。老陶は違った。蘇北には親戚も友人もいなかったし、そこで仕事をしたこともなかった。老陶は一枚の地図だけを頼りにいろいろ考えて、一つの円を描いたのだった。

果たして二日後、ある一団がやってきて、老陶の家の前でドラを打ち太鼓を叩き、大声でスローガンを叫んだ。その人たちは緑色の服を着て、腰に人造革のベルトを締めていた。何人かの顔は、かすかに見覚えがあった。老陶一家はわかっていて、この人たちは一年前に来たのと同じ一団だ。もちろん、今度の目的は前回と同じではない。老陶を吊るし上げにきたのではなく、解放しにきたのだった。これはまさに老陶の望みにかなっていた。もし別の一団が来たとしても、老陶はやはり解放されただろうが、このように徹底的に解放されることも、問題が明らかになることもなかっただろう。

一団は腕を振りながら叫び、その声は廊下全体に響いたが、スローガンの内容はすでにまったく違っていた。その後、この人たちは老陶の家の戸口の両側から、すでに色あせた赤い紙の標語を引き剥がし、糊を塗って新しい標語を上から貼り付けた。新しいという意味は、墨がまだ乾いておらず、紙が真っ赤であっただけでなく、内容がまるで違っていることにあった。使われている言葉は、「打倒せよ」「砲撃せよ」「焼き尽くせ」から「出発を祝う」「下放に栄光あれ」に変わっていた。

吉報を知らせにきた一団はひとしきり騒いだあと、大手を振って去って行った。間もなく、かすかなドラの音が裏のアパートでまた鳴り響いた。どうやら、下放の栄光を得たのは老陶一家だけではないようだった。

およそ数分後、陶文江タオウェンチンが出てきた。糊の瓶とベッドを掃除する小さい箒を一本持つていて、戸口の標語の貼り直しに取りかかった。吉報を知らせにきた人たちは慌ただしく立ち去ったので、仕事のやり方が雑だった。標語の一部は縁がめくれ、一部はふくらんでいた。陶文江は慎重に標語を剥がし、ピンと伸ばして糊を足した。それから、小さ

い筈でならした。最後に洗面器に水を半分入れてきて、濡れ雑巾ではみ出した糊を拭き、一時間ほど乾かした。その間、老陶は何回か陶文江に言った。「お父さん、そんなことはしなくていいですよ。どうせ下放するんだから」

陶文江は「うん、うん」と言うだけで、まともに返事をせず、ずっと自分の仕事に打ち込んでいた。老陶は仕方なく、シャオタオ小陶におじいさんの手伝いをさせた。

老陶は心の中で思った。これはバカらしいことだ。「どうせ下放する」という理由だけではない。一年前、老陶が吊るし上げにあったとき、その一団は戸口に標語を貼り付けた。一団が去ったあと、そのときも陶文江はこのように糊を足し、空気を押し出して、忙しく働いた。その努力のおかげで、老陶の家の戸口に貼られた標語は明らかに、吊るし上げにあった家の中で最も整然としていて、丈夫で美しかった。今日、あの人たちは標語を剥がすのに大いに苦勞し、結局、新しい標語を古い標語の上に貼った。このため、陶文江の仕事はいつそう難しくなった。しかし、陶文江はとても辛抱強く、仕事中はずっと顔に笑みを浮かべていた。

「お父さんがうれしいのなら、やらせておこう」老陶は心の中で思った。

2

老陶の家は三階で、部屋が二つあった。一間は老陶とスーガウ蘇群の部屋で、もう一間は陶文江と陶馮氏タオフエンシが住んでいた。小陶の小さいベッドは祖父と祖母の部屋にある。台所と便所は廊下の向かい側にあり、隣の家と共用だった。一九五〇年代の建物で、部屋と廊下には赤紫色の床板が張ってあった。階段も木製だった。

この何日かで老陶の家は様変わりした。それは老陶と蘇群の家の戸口に貼られた新しい標語のせいではなく、部屋の中が変わったのだった。部屋に入ると、すべての家具がもとの場所から移動していて、ベッドだけが同じ位置にあった。

洋服ダンス、整理ダンス、本棚などの大きい家具は、すべて部屋の真ん中に集められていた。それらの家具がもともと寄りかかっていた壁には、石灰の白い痕跡があった。家具そのものもまったく様子が変わっていた。ムシロや米袋でくるまれ、さらに縄でしつかり縛ってあった。床には藁^{わら}くず、縄の切れ端、ボール紙、そしてムシロと米袋が散乱している。比較的小さい家具、たとえばクスノキの衣裳箱、ナイトテーブル、書き物机、洗面台も、すべてこれらの材料で梱包され、壁の隅、戸口、外の廊下に雑然と置かれていた。もちろん、きれいに束ねた本や雑誌も、いくつかあった。すべての家具、品物は珍しいほど外見が一致していた。同じ材料で梱包されていたからだ。黄金色で、毛羽立った荷物の外側に、太さの違う針金が巻いてある。針金にはさらに、細い鉄線で白い小さな布切れが結び付けてあった。布切れには例外なく、毛筆で「ワシナイ 洪沢県汪集公社三余村—ダオベイ 陶培毅、蘇群」と書かれていた。前者は老陶一家が下放する目的地、後者は老陶と妻の名前だった。

荷造りは二日にわたり、一家全員で取り組んだ。洋服ダンスを動かすときには、隣人も手伝いにくてくれた。大方目鼻がつくと、老陶はベッドの縁にすわって少し休憩して、タバコを一本吸った。荷造りが終わった家具の上にピンと立っている小さな布切れを見て、老陶はやつと安心した。

昼に職場の人が手続の書類を届けにきた。蘇群はお茶をいれてきたが、茶碗を置く場所さえなかった。老陶はその人をベッドにすわらせ、自分は立って話をした。蘇群は茶碗を持ったまま、そばで控えていた。その人はお茶を受け取り、少し口をつけてから茶碗を蘇群に返した。蘇群は茶碗を持って、その人が再び飲むのを待った。その人はもうお茶を飲まず、ひと通り指示を与えたあと、立ち上がって別れを告げた。帰りがけに、その人は老陶に言った。家具を運ぶトラックは午後に来ます。

果たして、午後二時に一台のトラックがやってきて、アパートの下に停まった。トラックの荷台に、二人の若者が立っていた。家具を運ぶ手伝いに来たのだ。老陶の家族にとっては、思いがけない喜びだった。家具は自分たちで車に乗せるものだと思っていたから。おそらく、昼に蘇群がお茶を出したことが功を奏したのだろう。老陶の一家は、

おかげで特別な待遇を受けた。これで隣人に迷惑をかけずに済む。

あらゆる家財が三階から担ぎ下ろされ、トラックに積まれた。二人の若者は経験豊富で、家具を隙間なく積んだ。重いもの、大きいものは下に置き、軽いもの、細々した家具は上に置いた。いちばん大切なのは洋服ダンスだった。やたらに大きいだけでなく、前面に大きな鏡がはめ込まれていたからだ。蘇群はすばやく、梱包された洋服ダンスの上に二枚の布団綿を当て、縄でしっかりと縛った。この特大の荷物は四人がかりでやっと車に積むことができた。二人の若者が前を担ぎ、老陶と蘇群がうしろを担いで、陶文江も手を貸した。運び上げられた洋服ダンスは高々とそびえ立ち、車のまわりに立っている老陶一家と見物している隣人を見下ろしていた。ムシロと米袋の間から、かすかに顔をのぞかせている鏡は、輝く目のような光を放った。それから、トラックはアパートの門を出た。

老陶たちが部屋に戻ると、そこはすでにガランとしていて、散乱している米袋と縄だけが赤紫色の床板を覆っていた。四方を見回して、老陶は言った。「本当に、前より広々したな！」

3

その晩、老陶一家は軍の宿泊所に泊まった。ここで夜を過ごしたのは、老陶一家だけではない。四、五十の家族が、みんな明日下放することになっていた。宿泊所の庭は、急に騒がしくなった。食堂で夕飯を済ませてから、全員が性別と年齢によって分けられた。男たちは一緒に泊まり、女たちは子供を連れて別の部屋に泊まった。どの部屋にも十台ほどのベッドがあり、真っ白いシーツが敷いてあった。

消灯まではお互いに部屋を訪ねてよいので、老陶と陶文江は蘇群と陶馮氏の部屋にやってきた。そこはまるで母系社会のようだった。一人のおばあさんがベッドの縁にすわり、その娘や息子の嫁はたらいを持って、おばあさんが足を洗うのを手伝っていた。一人の若い女は服をまくって、赤ん坊にお乳をやっていた。やや大きい子供たちは、ベッ

ドを回りながら追いかけてこをし、大騒ぎしている。その間に母親が子供を叱りつける声、祖母のあきらめのため息、赤ん坊の泣き声が混じる。咳やしやくりの音、独り言や世間話も絶えず聞こえていた。

老陶と陶文江は一台のシングルベッドの上にすわった。そのベッドの大きさは部屋のすべてのベッドと同じだった。この一台は今夜、完全に老陶一家のものとなり、蘇群が小陶と一緒にこのベッドで寝るのだった。陶馮氏には隣のもう一台のベッドが割り当てられ、別の一家のおばあさんと一緒に眠る。そのベッドを老陶一家は今夜半分だけ使うことができた。使えるのは当然、蘇群と小陶寄りの半分だった。

老陶と陶文江はしばらくすると、自分の部屋に戻った。そこにも同様に十数台のベッドが置かれていた。部屋はガランとしていて、蘇群たちとこの賑わいに遠く及ばない。消灯まで十数分あったので、各家の男たちはまだ家族を訪ねに行っていた。十数分後、男たちは次々に戻ってきて、すぐに歯を磨き床についた。暗闇の中、老陶は長いこと眠れなかった。すでに三十年、老陶は陶文江と同じベッドで寝たことがない。このとき、肌着と布団を隔てて父子二人は寄り添い、お互いに相手の体温を感じていた。

空がまだ明るくならないうちに、軍用ラッパが鳴り響き、宿泊所のあらゆる部屋の明かりがついた。下放する家族は起床し、急いで荷物を片付けた。それから、子供の名前を呼びながら庭の洗面所に出てきて顔を洗った。七つか八つはある蛇口が一斉にひねられ、冷たい水が洗面所の下のコנקリートに落ちる。人々は暗闇の中、名前を呼び合っていて、やっと家族を探し当てた。それから老人や子どもの手を引いて、食堂に行き朝食をとった。

彼らを運ぶバスがもう庭に停まっていた。バスは五、六台あって、きちんと列を作っていた。少しずつ夜が明けるにつれて、車の前方に掛けてあるリボンは灰色から赤に変わり、これ以上ないほど赤くなった。このとき、すでに空はすっかり明るくなっていた。

下放する家族は目的地と人数によって組を作り、五色の旗とリボンを飾ったバスに分乗した。老陶一家は全部で五人、同じバスには他に六家族がいた。みな洪沢県の汪集へ行く人たちで、具体的な大隊と生産小隊

（人民公社の下部組織として生産大隊）さらに

その下に生産隊があった」が違っているだけだった。お互いの行き先はみな近くて、せいぜい一、二キロしか離れていないらしい。今後は、同じ地区の隣人になるのだ。

お互いに交流を深め、住所（行き先の大隊と小隊）を伝え合っていたとき、バスは動き出し、宿泊所の前の大通りに出た。続いて南京の幹線道路である中山路を走る。途中で、どんどん車が増えてきた。南京大橋に近づいたとき、車の列はすでに数キロにわたって延々と続き、列の始めと終わりは見えなかった。人を運ぶバスのうしろは、家具と荷物を運ぶトラックだった。トラックの列はもつと長い。木々とビルにさえぎられ、見通すことはできなかった。

車窓の両側は見送りの人の群れで、叫びながら腕を振り回している。バスに乗っている人も次々に窓を開け、身を乗り出して、手を振って応えた。長江大橋の上で、見送りの儀式は最高潮に達した。無数のドラ、爆竹、旗、標語があふれ、両側の隊列はますます整然としていた。緑の服を着て紅い腕章をつけた若者は、「忠字舞」（毛沢東を称え、忠誠を誓う踊り）を踊り出した。

このような光景を老陶は、解放軍入城（一九四九年四月に人民解放軍は南京を占領した）を歓迎したときにしか見たことがない。あのとき老陶は道端に立って、感激に酔いしれた。しかしいま、老陶はバスの中で呆然としていた。あのとき、解放軍は町に入っただが、老陶たちはいま町を出ていく。しかも追い出されるのだ。町を追い出されるのに、こんなに盛大な儀式が必要だろうか？ 老陶はどう考えても、答えが見つからなかった。

車の速度はともゆつくりで、歩くのと大差ない。全長二キロもない（両岸の土手まで加えても五キロを越えない）橋を、老陶たちはたつぷり時間をかけて進んで行った。

橋の北側の橋頭堡を過ぎると、車の速度が増した。道端には見送りの人たちがいなくなり、かすかなドラや太鼓の

音も河を隔てて聞こえるだけになった。老陶たちは静寂の中に入ったようだった。窓の外に藁の山、家畜、農家が現れ始めた。大きなカーブを曲がったとき、ついに後方のトラックの隊列が見えた。老陶一家の洋服ダンスは目立つ存在だったが、このときは見分けがつかなかった。

その後、バスに乗っている人は昼飯をとり始めた。ビスケットやパンをかじりながら水筒の水を飲んだ。家族がお互いに食べ物ーリング、煮タマゴ、ザーサイ、凍り豆腐などを交換した。満腹になったのに加えて車体が揺れるので、みんな思わず眠気を催した。こうして、どれくらい時間が過ぎたのだろう。突然、バスが止まった。路も半ばを過ぎ、用を足すべき時間になったのだ。

丘陵地帯はすでに終わり、目の前は果てしない蘇北平原だった。大地はまるで鍋の蓋のように丸かった。いわゆる便所は、あまり遠くないところにある藁の山にすぎない。

当然、女たちが優先で、次々と溝を越えて、黄金色の藁の山に向かった。老婦人は若い女に支えられて、起伏を乗り越えて行く。極端に年老いたおばあさんがいた。おそらく、九十に達しているだろう。孫娘（年齢からしてそう思われる）が、そのおばあさんを背負って藁の山に向かって走った。おばあさんの頭は、すでに真っ白だった。白髪がふわふわと揺れながら、金色の藁の山に近づいて行った。

女たちが用を足している間、男たちは道端に立って待っていた。首を伸ばして前後を眺め、車の列の始めと終わりを見ようとしている。できれば自分たちの家の家具を運ぶトラックを見つけたかった。残念なことに車の列は長すぎるし、道が少ししか湾曲していなかった。男たちはあきらめるしかなかった。

ついに男たちが用を足す番になり、起伏を越えて藁の山へ駆けて行った。途中で、戻ってきた女たちとすれ違い、互いに挨拶を交わした。男たちが藁の山の背後に着くと、そこは一面のぬかるみだった。まるで雨が降ったばかりのようだ。くぼみには尿がいつぱいたまり、表面に泡が浮かんでいた。大便をした女もいた。紙があちこちに散乱し、何枚かはまるで白いハトのように、風に吹かれて前方の緑の麦畑へ飛んで行った。

小便の臭いの中で男たちは用を足し、ズボンを上げて藁の山のうしろから出てきた。男たちがバスに戻ると、運転手は人数を点検し、前進を続けた。

道中ずっと陶文江はラジオを聞いていた。バスの進行方向が変わるたび、ラジオはジージーと音を立てた。アナウンスの話す声はとぎれとぎれで、はつきりしたかと思うとまた曖昧になった。陶文江は方向を調整するのに忙しかった。

陶文江が聞いていたのは南京のラジオ局だった。このラジオ局を陶文江は聞き慣れている。このときはちょうど、今回の下放のニュースを飽きもせず、くり返し放送していた。ドラや太鼓とスローガンの声が車内にこだましていたが、それはもう窓の外から伝わってきたものではなく、ラジオから出たものだった。最後は、ドラと太鼓の音さえ聞こえなくなった。

その後、現地のラジオ局の放送が聞こえてきた。話している言葉は、聞きなれない方言で、語調がぎこちなく突拍子もない感じだった。誰もが、もうすぐ目的地に着くのだとわかった。老陶が腕時計を見ると、すでに午後四時を過ぎていた。窓の外の景色もこのとき変わり始め、草ぶきの家や茅が生い茂る荒地が現れた。空の色も薄暗さを増し、冷たい空気が隙間から車内に入ってきた。

本来なら、この時間にはもう洪沢県の県城（県政府の置かれてある町）に入っているはずだった。しかし、前方で河川工事をやっているため、道を変えて進まなくてはならなかった。バスは郊外を通り、県城に入らずに直接、人民公社へ向かった。

河川工事をしている農民は堤防の両側に並び、車の列がゆっくり通り過ぎるのを見ていた。彼らは組織されて来ているのではなかった。少しも歓迎の意志がなく、ただ車の列や乗っている人を観察しているだけで、表情は厳しくて生気がなかった。農民たちが車内を見たとき、車内の人も農民たちを見た（車の窓はこのときすでに全部開いていた）。老陶は午前中の歓送の場面を思い出さずにはいられなかった。歌いながら舞う、大変賑やかな歓送だったが、

人々の目は相手をまったく見ていなかった。彼らは自分の演技と喜びに浸っていた。それが老陶を落ち着かない気持ちにさせたのだ。しかしこのとき、河川工事の農民はじつと老陶たちを見つめていた。これでは当然、落ち着いた気分にならない。ただ、この二つの落ち着かなさには多少違いがあった。

河川工事をする人は薄着で、服はボロボロだった。上半身裸の人もいた。青年と壮年が多くを占め、手にはスコップと天秤棒を持ち、何も言葉を発しなかった。彼らの背後に、広く深く掘り下げられた河床があったが、まだ水は引かれていなかった。至るところに新しい黄土がある。乱反射する夕日は景色を異常に明るく変え、目の前のすべてを（立ったまま動かない農民を含めて）一つの静止画に変えた。

車の隊列は臨時に敷かれた木の板の上を通った。すぐに、河川工事の現場は後方に遠ざかった。車がでこぼだらけの舗装されていない道に入ったとき、隊列はすでになんまり短くなっていた。いくつかの分かれ道で、バスと家具を運ぶトラックが行き先によって分散して行った。分散は知らぬ間に行われ、老陶は隊列の規模が小さくなったことしかわからなかった。日が暮れかかったとき、道には彼らのバスだけが残っていた。バスのうしろには四、五台のトラックが続いている。老陶一家の家具を載せたトラックは、洋服ダンスが高くそびえ立っているので容易に識別できた。

5

空が完全に暗くなっても、窓の外の景色はまだぼんやりと見分けることができた。明かりはないので、星の光のおかげだった。このとき、バスは網目のような水路に覆われている地域に入った。車窓の両側の至るところに、キラキラ光る水面が見えた。舗装されていない道は狭くて、路面がまったく見えず、車両はまるで水上を進んでいるようだった。ただその激しい揺れが、実際には陸地を走っていることを証明していた。光が薄暗いので、道沿いの河の広さや深さはよくわからない。絶えず揺れているバスは、いつ道沿いの河に転落してもおかしくなかった。乗客は緊張

した。

その後、バスがついに停まった。青いコートを着た人が車のドアから入ってきて、土地の言葉で老陶と蘇群の名前を叫んだ。老陶は慌てて立ち上がり、人をかきわけて行つて握手をした。あとでわかったことだが、青いコートを着た人は三余一隊の生産隊長で、彼らが到着した場所は小墩口シャオドンコウと呼ばれていた。

老陶一家はついに到着した。彼らは余隊長ユイと相談をしながら荷物をまとめ、車内のまだ目的地に到着していない何家族かの人たちに別れを告げた。降りてみると、バスは道沿いの河からまだかなり離れている。その河は幅が狭く、月に照らされて銀色に光っていた。このとき、陶文江がいまいことがわかった。

陶文江は車のうしろに回り、用を足す場所を探していたのだ。しかし、目の前の平原にはさえぎるものがまったくなく、公衆便所はおろか、藁の山も見当たらなかった。陶文江は路肩の下に白っぽい道路があるのを見つけた。うねうねと続き、果てが見えない。陶文江はアスファルトの道だと思った。この道とバスが走ってきた舗装されていない道は平行していた。陶文江は、バスがなぜこのアスファルトの道を通らず、でこぼこの舗装されていない道を走ってきたのか、まるで考えなかった。陶文江は、アスファルトの道の向こう側に何軒かの家があるのを見つけた。窓には明かりがともっている。そこに便所があるかもしれない。陶文江はアスファルトの道を渡つて向こうで用を足そうとした瞬間、河の中に足を突っ込んでしまった。

最初からアスファルトの道路はなく、存在するのは道沿いの小さな河だけだった。さいわい河の水は浅く、陶文江はすぐに足を引き戻したので、綿入れのズボンのすそを濡らしただけだった。はいていたゴム靴を河底の泥の中から抜き出すと、水がいつぱい入っていて、ビチャビチャ音がした。河の水は骨にしみるほど冷たかった。この思わぬ災難にもよいところがあった。陶文江は、しばし用を足す必要を忘れていた。

老陶は自分と蘇群が小墩口に残り、トラックから家具を下ろすのを待つと決めた。陶文江、陶馮氏と小陶は村の女たちに送ってもらい、先に三余一隊に行くことになった。

小墩口から三余一隊までは、一キロ足らずの距離だった。ただ、その間は道とも言えない。実際は起伏のある堤防で、当然車は通れなかった。そうでなければ、バスは直接村まで行くことができたはずだ。

大隊からの知らせを受けて、三余一隊の老若男女はほとんど総出でやってきて、小墩口の道路のわきで老陶一家を出迎えた。この小墩口は三余の人たちにとって、普通の場所ではない。幹線道路に面しているというだけでなく、道端に何軒かレンガ造りに瓦屋根の売店（それは陶文江が「アスファルトの道」を隔てて見たあの何軒かの家だった）があったからだ。だが、当然その日はすでに閉店していた。三余の人たちは今夜、この店を目指して来たのではなく、老陶一家を出迎えにきたのだ。すでに八十人から九十人の人が集まっている。天秤棒と竹カゴを持った男が、老陶一家の家具を運ぶ手伝いに来ていた。女と子供と老人は、ただの見物だった。ドラや太鼓まで持ってきていて、すぐに鳴らし始めた。しかし、音の調子からすると、下放を歓送するドラや太鼓の賑やかさには程遠く、どうやらドラは一つしかないようだった。太鼓の音も太鼓から出たものではないようで、鳴らしているのがどんな代物なのかわからなかった。

とは言え、やはり老陶はうれしかった。一日のうちに、三組の道端に並んだ人々に出会ったが、目の前にいるこれらの村人たちだけが老陶に親しみを感じさせ、気持ちを感じさせてくれた。

6

女たちは、陶文江、陶馮氏と小陶を取り囲み、村に向かって歩いた。

陶馮氏は纏足^{てんそく}の経験があり、のちにそれを解いたが、やはり歩くのが遅かった。それに先ほど陶文江が川に落ちたことによる驚き^{おどろき}が加わり、ほとんど歩けなくなっていた。二人の三余の娘が、両側から陶馮氏を支えた。支えると言うより、吊り下げていると言うほうが正しいだろう。このようにして、足が地に着かない状態で三余村への道を急いだ。

女たちは飛ぶように速く歩いた。陶文江も大股で歩き、小陶の手を引いて、あとに続いた。月光が堤防を照らし、でこぼこした影をはっきりと見せていた。それでかえって足の運びが慎重になる。陶文江は抜き足差し足で歩いたが、何度も転びそうになった。小陶の手を引いていると言うよりも、小陶を杖にしていたと言ったほうがよかった。村に近づくと、犬の鳴き声が聞こえてきた。続いて、前方に真つ暗な茂みと家屋が現れた。ポツポツと明かりがともっていたが、きわめて弱い光で、月の輝きの下ではほとんど意味がなかった。

彼らは橋のたもとまでやってきた。橋を越えれば三余一隊に入る。

この橋は六十センチほどの幅で、太さの違う丸太を縛って作られていた。橋の下にはキラキラと輝くイエンマ嚴媽河の水が流れていた。陶馮氏はどうしても、もう歩こうとしなくなった。娘たちがいくら励ましたり引っぱったりしても、足を踏み出そうとしない。このため、みんなが橋のたもとで手間取った。一人の女が率先して橋を渡った。その足取りはしっかりとっていて、あつという間に橋の向こう側に着いた。この行動は陶馮氏を説得できなかっただけでなく、むしろいつそう怖がらせた。陶馮氏から見ると、その女はまるで綱渡りの軽業師のようだった。

陶文江と小陶は思い切って橋を渡り、同行する女たちもほとんどが橋のこちら側に着いた。対岸には陶馮氏と両脇を支える二人の娘だけが残った。小陶が河を隔てて「おばあちゃん」と叫ぶと、陶馮氏は焦って泣き出してしまった。その後、妙案を出した人がいて、上着を脱いで陶馮氏の頭にかぶせ、それで何とか橋を渡らせたのだった。

彼らは脱穀場の牛小屋に案内された。牛飼いの老人が起こした火で、陶文江はズボンを乾かした。人々は焚き火を囲んですわり、それぞれ手を広げた。巨大な影が土壁の上でしきりに揺れ動いた。

牛小屋の天井はアシの茎で編み上げたもので、そこから灰色の物体が束になって垂れ下がっていた。それはまるで数百房のブドウのようだった。三余の人はこれを「吊デフ吊フ灰アホイ」と呼んでいて、すすや埃ほこりがアシの葉に付着してできたものだった。牛飼いの老人が薪を加えると、炎はますます高く燃え上がり、いまにも天井の吊吊灰に届きそうになった。陶馮氏は焦って叫んだが、三余の人たちは異口同音に「大丈夫、大丈夫」と言った。

薪を加え続けたので、炎はさらに高く燃え上がり、本当に吊吊灰に届いた。小さな炎が上がったが、それはすぐに消えた。先端で踊っていた火花も、やがて跡形もなくなった。陶馮氏は苛立ちを募らせたが、三余の人たちの言葉がわからず、その行動も理解できなかった。陶文江を責めるしかなかった。「いい年をして命知らずね！ 何を笑ってるの！」

陶文江は前歯が二本欠けた口を少し開けて、へらへらと笑った。焚き火のそばにすわっていたため、綿入れズボンの湿った膝下を引っくり返すと、白い蒸気がかすかに立ちのぼった。

綿入れズボンを乾かしたあと、陶文江、陶馮氏、小陶は村人の家に案内されて夕飯をとった。このとき、老陶と蘇群も家具を運ぶ男と一緒に村に入ってきた。家具が老陶一家の新居の前の空き地に運ばれたあと、老陶たちはようやく村人の家に到着し、陶文江たちと合流した。

食事中、室内には何重にも人垣ができて、食事の様子を見物していた。すでに三余の人たちの夕飯時間は過ぎていたので、相伴する人はいなかった。戸主の呂素英は四十過ぎの中年女性で、狭い台所で忙しく働いていた。小さいテーブルには、小鉢が四つ置いてある。盛られているものは真つ黒で、どんな料理なのかわからない。インク壺で作った小さなランプは、まるで豆粒のような明かりで、テーブルの上の四つの小鉢と老陶たちが持っているご飯茶碗（中のおかゆも何の穀物で作ったものかわからない）を照らし出していた。静寂の中で、おかゆをすする音だけが聞こえた。

食べ終わると、余隊長の引率で、うしろに三余村の人々が続き、老陶一家は新居に向かった。橋のたもとを過ぎると、すぐに着いた。老陶一家の新居、別の言い方をすれば、一軒の家が目の前に現れた。

この家はとても奇妙だった。土壁や草ぶきの屋根はいいとして（三余の家はみなこうだった）、屋根の棟は明らかに高さが異なり、西側が高く、東側が低く、大きく弓なりになっている。東側の縁は、少し反り返っていた。一目で、これは棟木がまっすぐでないせいだということがわかる。明るくなってから、老陶たちは村の各家を回ったが、

このような家は一つも見なかった。

月光の下で、家の土台は陥没し、壁全体がほとんど地下に落ち込んでいた。傾いた草ぶき屋根は長い白髪に覆われたようで、戸と窓がふさがれていた。家の前の空き地で、老陶一家は久しぶりにあの洋服ダンスを見た。ムシロや米袋に固く包まれてしつかりと立ち、くつきりした影を落としていた。見たところ、洋服ダンスは家よりもさらに高いようだった。もちろんそれは幻覚ではない。そのほかの梱包された家具は、空き地の四方に散在していた。余隊長がギーッと音を立てて戸を押し開けた。

家の中は変な臭いがした。聞いてみると、この家はもともと牛を飼っていたところ、生産隊の牛小屋なのだった。のちに新しい牛小屋を建てたので（さっき陶文江が綿入れズボンを乾かした場所）、牛はここから引き出されて行った。牛たちが出て行つてすでに一年あまり経つが、臭いはまだ残っていた。

老陶は余隊長に尋ねた。「隊には何頭の牛がいますか？」

余隊長は、「五頭です」と答えた。ちょうど老陶一家の人数と同じだった。

戸の内側には、土レンガが散らかっていた。途中まで池のような形に積み上げられたレンガもある。生産隊では老陶一家のためにかまどを築こうとしたのだが、あまりにも到着が早かったので、半分しかできていないのだった。部屋の西側の隅には、三余の人が老陶一家のためにベッドを用意していた。それも土レンガで築いたもので、上には藁が敷いてある。ベッドはとても大きくて、老陶一家が眠るのに十分な広さがあつた。あたりは暗く、明かりもない。南京から持ってきたシュロのマットの包みを解いて備え付けるのは、あまりに面倒だった。そこで老陶たちはトランクを一つだけ開け、布団綿と掛け布団を何枚か取り出して、土レンガのベッドで眠りについた。

翌日の朝早く、老陶一家は起床した。戸を押し開けて外へ出ると、そこは新しい世界だった。早朝の陽光が果てしない蘇北平原を照らしていた。霧はまだ晴れておらず、近くの小川の上に漂っている。すっかり葉を落とした木の枝の間から、三余村の高さの異なる草ぶき屋根がのぞいていた。地面が少し湿っていて滑るのは、夜露と霜が降りたせいだった。誰が積んだかわからないサツマイモの蔓の山に向かって、セーターを四枚重ね着した小陶は突撃の練習を始めた。小陶はとても興奮しているようだった。もちろん、老陶も同じだ。身を切られるような冷たい空気の中で、老陶は思わず胸を広げる運動をした。

この日、老陶一家は三余一隊の村人を訪ねた。

この村の家は一軒ずつ独立した敷地内にあり、四方を小川に囲まれていた。真南に村道に続く橋があった。橋といつても実際には土手だ。下にコンクリートの土管が埋まっていて、川の水を通すようになっていた。だから水がよどむことはない。敷地内に建てられた村人たちの家は、すべて土壁で草ぶき屋根だった。家の前後は個人保有地で、穀物と野菜が植えられていた。ほとんどの家の裏に、青々とした竹林があった。

老陶一家の牛小屋も独立した敷地内にあったが、建物の裏に竹林はなく、手前に農作物の畑もない。家の前は硬い地面だった。ここはもともと生産隊の脱穀場だったのだ。一年ほど前、脱穀場が村の西に移されると、古い脱穀場は荒れてしまった。脱穀場と同時に、牛小屋と飼われていた五頭の牛も引越した。古い脱穀場も新しい脱穀場も村のはずれ（古い脱穀場は東のはずれ、新しい脱穀場は西のはずれ）にあり、村から百メートルあまり離れていた。そのため老陶たちの家（牛小屋）は明らかに孤立していて、竹林もないので、初冬にはますます荒涼としていた。

このとき、家の前の空き地に散乱していた家具や品物は、荷を解かれ、ありのままの姿をさらけ出した。取り囲んで見ている農民は多かったが、手伝う者は少なかった。品物の包みを開けるごとに、群集の中からどよめきが起る。三余の人々は老陶たちがよくわからない地元の言葉で議論しながら、みぞおちをさすったり唾を吐いたりした。こういう驚きの表現も、老陶たちが見たことのないものだった。女や子供が勇気を出して近づいてきて、珍しいと

思ったものを気が済むまでなけると同時に、当惑の表情を見せた。彼らが最も興味を持ったのは一カゴの豆炭で、これは老陶一家にとって、まったく意外なことだった。

三余の人は薪や草を燃やすだけで、石炭は珍しいものであり、同じ大きさに作られた黒光りする豆炭はなおさらだった。彼らはもちろん見たことがなかった。このような精巧なものを燃やし、それで飯が炊けるのか？ 三余の私たちは不思議に思った。

三余の人たちが驚いたので、老陶たちは豆炭を見直さないわけにはいかなかった。確かに、いまの環境の下で豆炭は明らかに目立っていた。飯が炊けるからではなく、その色のためだ。豆炭はとても黒く、すべてが灰褐色の田舎の景色の中に、黒さでこれに勝るものはなかった。

子供が豆炭を一つ拾い、すっかり葉を落とした近くの小さな木に向かって投げた。豆炭は木の幹に命中した。陶馮氏は大声で、その子供を叱った。小陶が砕けた豆炭を拾いに行くと、人目を引く黒い跡がすでに木の幹に残っていた。

二つ目に三余の人が驚いたのは大きな洋服ダンスで、それは四重五重の包装の中から姿を現した。一枚包装を破るごとに三余の人はため息をついた。包装の下にまた包装があったからだ。老陶たちがこのようにダンスを慎重に扱うことが、三余の人たちにとっては神秘的に感じられた。さいわい、完全に露わになった洋服ダンスは決して彼らを失望させることなく、むしろ包装を解かれる前よりも人々を驚嘆させた。

それはダンスが大きいからでも、作りが凝っているからでもない。また、三余の人が見たこともないものだったからでもなかった。それは鏡のせいだった。このとき、鏡は目の前の田畑を映していた。三余の人が見慣れていて気にもとめない田畑は、鏡の中でまったく違うものだった。毎日顔を合わせている村の仲間たちも、鏡の中ではまるで別人だった。

村人たちは両側から取り囲み、鏡に向かって首を伸ばした。まるで、そこに井戸があるかのようなだった。うしろにいる人は、前にいる人を突いて冷ややかした。前にいる人は恥じらいながら、うしろの人を引っぱった。さらに多くの

人が洋服ダンスのうしろに立ったが、そこに鏡はなかった。

しだいに、村人たちはいくらか慣れて、鏡の前に立つて観察を始めた。観察しながら、お互いを冷やかした。

「おい、黒いの。まるで老陶の家の豆炭と一緒にだな！」

「なんだと、白いの。老陶の家のアルミ鍋みたいじゃないか。顔が映せるぞ！」

お互いに、見知らぬ人のようだった。無理もない。豆炭やアルミ鍋はもともと三余になく、今日初めて目にしたのだ。老陶は農民たちの賢さに、心から感嘆した。彼らは学びながら、物を使いこなしていくことができる。

大きい洋服ダンスは戸口の前の空き地に二時間あまり展示され、あたりが暗くなつてからようやく牛小屋に運び込まれた。その後一か月あまり、三余の人は絶えず老陶の家を見学に訪れた。主な目的は大きな洋服ダンスを見ると、洋服ダンスの前の鏡を見ることだった。来るのは女たちが多かった。みんなきれいに着飾つて、青い上着をはおり、髪を整えたときの水がまだ乾いていない。髪に小塚口の売店で買ったプラスチックのヘアピンを挿している者もいた。女たちは単独で老陶の家を訪れることはなく、いつも連れ立ってやつてきた。ときには二、三人、ときには四、五人、またあるときには団体で老陶一家の鏡の前に押しかけて騒ぎ、歯茎をむき出して笑った。老陶は思いもしなかったことだが、蘇群と結婚したときに買った洋服ダンスが、いま村の人々とながらを持つ助けになっている。その後、老陶は蘇群と相談して、洋服ダンスを寝室から居間に移した（牛小屋はこのときすでに三部屋に仕切られていて、一間は老陶と蘇群の寝室、一間は陶文江と陶馮氏が小陶と一緒に寝起きし、真ん中の一間を居間にしていた）。訪れた村人はいつでも、気が済むまで鏡を見ることができた。

シムウユエ

九月子という十六、七歳の少年は、老陶一家が引越してきたときに、いろいろと雑用を手伝ってくれた。本人は老陶一家と特別な関係にあると思ひ、自分に任務を与えた。それは戸口の見張り、老陶の家の門番だ。老陶の家を見学にくる女たちは、九月子の許可を得なければならなかった。老陶は不意だったが、口出しはできない。片方は仲よくする必要のある三余の大衆で、もう片方も三余の地元民（子供に過ぎないとは言え）である。どちらも軽率に恨みを買う

わけにはいかなかった。

8

夜は相変わらず寒かった。いくらベッドの上に厚い藁を敷き、藁の上に二枚の布団綿を広げ、四キロもある掛け布団をかけても、老陶たちの体は依然として暖まらなかった。

牛小屋の壁には無数の隙間があり、その大きさや幅はさまざまだった。いちばん大きな隙間は、小陶が手を差し込むことさえできた。明かりを消したあと、枕元の掛け布団の上には一筋の月光が揺れ動いている。夜半すぎ、月が沈むと、目に見えない冷たい風が耳元と首筋を吹き過ぎた。牛小屋の天井いつぱいに「吊吊灰」が垂れ下がっていたので、陶馮氏は部屋の中で火を起こすことを絶対に許さなかった。

〈続く〉

コレクション
中国同時代小説 3

小陶一家の農村生活

韓東 著／飯塚容 訳

定価三、七八〇円（本体三、六〇〇円）

ISBN978-4-585-29513-6 C0397

四六判・上製・三九二頁

二〇一二年四月刊行予定

勉誠出版 株式会社 刊